

ユニバーシティ・カレッジ・  
ロンドン・コネクションの形成  
——イギリス留学生とコネクション——

Japanese Students at the University  
College, London, 1864-1889

井 上 琢 智

Japanese students going overseas to study during the Bakumatsu and the early Meiji Eras played an important role in the modernization of Japan. Many of them studied at the University College, London. This particular college was convenient for foreign students in this period for economical, religious and curricular reasons. Furthermore the famous English merchant T. Grover and Professor A. W. Williamson supported Japanese students. However from the 1880's, this college was gradually giving way to Oxbridge and German Universities, because Japanese students hoped to specialize their studies.

Takutoshi Inoue

JEL : A14, B31

キーワード : 日本人留学生、イギリス、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン、近代化

Key words : Japanese students, England, University College, London,  
modernization

## I. イギリス留学を支えた人びと

幕末・明治初期のイギリスへの組織的な留学生派遣は、文久2(1862)年にフランス・オランダ・プロシア・ロシア・ポルトガルに加えてイギリスを公式訪問した「大君の使節」—オールコック駐日公使の賜暇帰国に同行した勘定格

調役の淵辺徳蔵と調役兼通詞の森山多吉郎<sup>1)</sup>は、ロンドンでこの使節に合流した一が渡英した翌年に長州藩より派遣された 5 名の留学生に始まり、次いで元治 2 (1865) 年の薩摩藩による 17 名、更に慶応 3 (1866) 年には幕府自体が派遣した 14 名であった。

長州藩の派遣の場合<sup>2)</sup>には、志道聞多 (井上馨) により計画され、江戸留守居役小幡彦一や村田六蔵 (大村益次郎) によって具体的な準備がなされた。志道の計画を知った山尾庸三<sup>3)</sup>と野村弥吉 (井上勝) も同行を希望し、その結果、文久 3 (1863) 年 4 月 18 日に藩から、これら「三人御暇被下候はゞ於于下心遣仕、外国へ渡航し、学校へ入込、修行仕度由 … (帰国後は) 海軍一途を以、御奉公仕」<sup>4)</sup>べきことという内令が出された。この時、「稽古料」として各自 200 両と親書が与えられている。藩の許可を得た山尾と野村は、イギリス横浜領事館書記官ガワー (Abel A.J.Gower)<sup>5)</sup>と渡航・留学の相談を開始した。他方、志道は江戸へ向かう途中に同道していた伊藤俊輔 (博文) に渡航・留学を熱心

- 
- 1) 淵辺徳蔵について生没年を含め詳細は不明。森山多吉郎 (文政 3 年 6 月 1 日～明治 4 年 3 月 15 日) は、代々長崎のオランダ通詞の家に生まれ、嘉永元年偽装漂着のアメリカ人マクドナルド (R. MacDonald, 1824-94) から本格的に英語を学び、二ヶ国語の通詞となる。嘉永 3 年には『エゲレス語和解』の編集に従事し、6 年のプーチーチン来航に際しては、川路聖謨の通詞となり、活躍した。安政元年のペリー来航に際しても通詞となった。江戸小石川で英語塾を開く。門下生に津田仙、福地源一郎、沼田守一がおり、福沢諭吉も短期間ながら彼のもとで学んだ。この渡欧は、開港延期間題の交渉に出かけた竹内保徳遣欧使節の通詞としてであった。帰国後通弁役頭取、外国奉行支配調役、兵庫奉行就組頭など歴任したが、明治政府には出仕しなかった (芳賀徹『大君の使節－幕末日本人の西欧体験－』中公新書、1968、富田仁編『海を越えた日本人名辞典』日外アソシエーツ、1895、『明治維新人名辞典』吉川文館、1981)。
  - 2) 以下の記述については、石附実『近代日本の海外留学史』(ミネルヴァ書房、1972) 第 2 章を参照した。
  - 3) 山尾は、すでに文久元年英学修行のために函館に渡っており、留学の動機は、志道と同様、海軍術の習得であった。野村もまた安政年間に長崎で蘭学と洋式兵法を学び、後に江戸の蕃書調所へ移ったが、その低い教育程度に失望して、函館へ赴き、武田斐三郎のもとで約一年半英学を学んだ。彼の留学目的もまた軍事であった。
  - 4) 末松謙澄『防長回天史』第三編の下、明治 45 年、169 頁。
  - 5) その他、彼らの渡英に協力したのは、このエーベルの兄で、のちにお雇い外国人となった鉾山技師エラスマス (Erasmus H.M. Gower) とジャーディン・マセソン商会の第二代支店長で、文久 2 年に横浜居留地自警団長も務めた S.J. ガワー、さらに同商会の長崎代理店のグラヴァー商会のグラヴァーなどであった (山本有造「三人のガワー」吉田光邦編『19 世紀日本の情報と社会変動』京都大学人文科学研究所、1985、40 頁)。

に勧めた結果、藩の公式な許可を得ず、行動をともにすることとなった。遠藤謹助もまた江戸で遠藤の親類であった小幡の勧めに応じて、藩の公式な許可を得ず、一行に加わった。準備された旅費・滞在費は1年半をあわせて約5,000両であった。

文久3年5月12日に横浜を出航、9月23日にロンドンへ着いた。語学については、野村がわずかに会話ができる程度であったが、ロンドンではマセソン商会のヒュー・マセソン (Hugh Matheson, 1821-98) – ジャーディン・マセソン商会の創立者の一人であるマセソン (James Matheson) の甥 – が彼らの世話にあたり、その紹介でロンドン大学のユニバーシティ・カレッジの化学教授であったウイリアムソン (A.W. Williamson, 1824-1904) と契約し、その世話を受けることとなった。とりわけ、野村と遠藤は、博士の自宅に寄寓し、エマ・キャサリン (Emma Catherine) 夫人から家族同様の世話を受けたという<sup>6)</sup>。また、彼の斡旋で彼らはユニバーシティ・カレッジで学ぶこととなった。志道と伊藤は、軍事・政治・法律を、野村、山尾、遠藤は理科・自然科学を主として専攻することになっていた。この渡航・留学で攘夷論から開国論に転じた志道と伊藤は、下関・鹿児島での攘夷の動きを伝え聞いて、その攘夷論を覆すために、わずか半年の留学で、元治元年5月15日 (1864年6月18日) に横浜に帰着した。ただちに、オールコック (R. Alcock, 1809-97) らを訪ね、和平解決に向けて藩主毛利慶親を説き伏せると伝え、オールコックの準備したイギリス艦で山口に赴いた<sup>7)</sup>。

薩摩藩の派遣の場合<sup>8)</sup>、留学生派遣計画を最初に立てたのは、藩主島津斉彬自身であった。安政4 (1857) 年のことである。この案は、薩摩とその属領琉球から10人前後を選び、英米仏国へ派遣し、その斡旋をフランス人に委ね、語学の他、物産 (産業一般の学問)、医術、舎密学 (化学) を中心に砲術、造船、航海術を学ばせるというものであった。しかし、斉彬の死によって頓挫してしまった。これを復活したのが五代才助 (友厚) であった。最初攘夷論者であつ

6) 犬塚孝明『薩摩藩英国留学生』中公新書、1974、77頁。

7) 『維新史料綱要』第5巻 (覆刻: 東京大学出版会、1983) 315-16頁。

8) 以下の記述については、犬塚孝明前掲書を利用した。記して謝意を表します。

た五代は、文久 3 年の薩英戦争の敗北により、急進的開国論者となり、外国貿易の急務と富国強兵策としての海外留学生派遣を痛感した。元治元年長崎に潜伏中、彼はスコットランド出身のイギリス商人グラヴァー (T.B.Glover, 1838-1911) と懇意となり、この計画は実現に向けて動きはじめた。彼は「五代才助上申書」<sup>9)</sup>を書いたが、その計画は具体的な数字で裏付けられたものであった。この計画では、留学生 16 名、通訳 1 名からなり、元治元年秋に英仏へ渡航させ、陸海軍術、砲術、天文、地理、製薬などを学ばせ、帰国後は彼らのうちの熟練者を教師とする学校を藩内に設けるというものであった。この「上申書」はただちに採用され、人選が始まった。その選考の対象となったのは、藩の洋学養成機関「開成所」である。人選の結果、門閥派 5 名、開成所から選ばれた 12 名 (英学専修生は 5 名)<sup>10)</sup>、それに随行員として五代 (関研蔵) と藩唯一の渡欧経験者であった洋学者松木弘安 (寺島宗則:出水泉蔵)<sup>11)</sup>が選ばれた。その中から実際に藩命 (元治元年正月 18 日) により渡航・留学したのは、門閥派として、新納久脩 (刑部:石垣鋭之助)、町田久成 (民部:上野良太郎)、畠山義成 (丈之助:杉浦弘蔵)、開成所からは市来勘十郎 (和彦:松村淳蔵:英学)、森金之丞 (有礼:沢井鉄馬:英学)、高見弥一 (松元誠一:蘭学)、東郷愛之進 (岩屋虎之助:蘭学)、吉田巳二 (巳之次、清成:永井五百助:蘭学)、磯永彦輔 (長沢鼎:英学)、鮫島誠蔵 (尚信:野田仲平:英学)、田中静洲 (朝倉省吾:蘭学)、中村宗見 (博愛:吉野清左衛門:英学)、町田申四郎 (実積:塩田権之丞:蘭学)、町田清蔵 (清次郎:実行:清水兼次郎:蘭学)、町田猛彦 (山本幾馬:蘭学)<sup>12)</sup>と、辞退した門閥 2 名に代えて新たに選ばれた村橋直衛 (久成:橋直輔)、名越平馬 (時成:三笠政之介) である。変名を使つての渡航であった。

元治 2 (1865) 年 3 月 22 日、五代の知己で通弁として雇った堀荘十郎 (高木政二) を加えた日本人 19 名とグラヴァーの右腕の一人で世話係として選ば

9) 『薩藩海軍史』中巻 (明治百年叢書) 原書店、1968、867-88 頁。なお、その内容の要約については、犬塚孝明前掲書、9-11 頁を参照のこと。

10) これら 15 名に加えて、島津織之助、高橋要が門閥派から選ばれたが、最終的に辞退した。

11) 松木弘安は、文久元年の竹内保徳の第一回遣欧使節の一員として、福沢諭吉らとともにイギリス、フランス、プロシア、ドイツ、ロシア、ポルトガルを歴訪した。

12) 町田猛彦は羽島で死亡した。

れたライル・ホーム (Ryle Holme)<sup>13)</sup>一行を乗せた「オースタイエン号」は串木野郷羽島を出航した。慶応元 (1865) 年 5 月 28 日、アレクサンドリアで乗り換えたイギリス船デルヒ号がサザンプトン港に錨を下ろした。二ヶ月余りの行程であった。鉄道に乗り換えロンドンに着くと、トーマス・グラヴァーの兄でジェームズ・グラヴァーが出迎えた。ケンジントン公園に面したケンジントン・ホテルに荷を解いた。その後、公園の北方ベースウォーター街にある宿舎を定め、そこで紹介された家庭教師について英会話などの習得に努めた。その家庭教師の一人は、バーフという名のイギリス人であった<sup>14)</sup>。いよいよ稽古が始まろうとしていた閏 5 月 2 日 (1865 年 6 月 24 日) および翌日曜日の 3 日に、ホームとグラヴァーとが長州藩士山尾庸三、野村弥吉、遠藤謹助に路上で遭遇したという。さらに、一週間後の閏 5 月 10 日 (1865 年 7 月 2 日) 日曜日午後 6 時頃に宿舎を訪ねてきた。以後、たびたび彼らは宿舎を訪ね、交流を深めたことは注目に値する。さらに、T. グラヴァーの紹介で外交官として来日経験がある親日家で下院議員であったオリファント (L. Oliphant, 1829-88)<sup>15)</sup>が紹介された。おそらく、このオリファントの斡旋で、長州藩士と同様、薩摩藩士もまたウィリアムソンの世話を受けることになったのであろう。これら語学教育を受けながら、彼らは必要な科目の学習に取り組み始めた。

---

13) 維新後グラヴァー商会が衰退した折、退社し、その頃台頭しはじめたライル・ホームの親戚筋の E. ホーム (Edward Z. Holme) とグラヴァーのもう一人の右腕であった F. リンガー (Frederick Ringer) の設立していたリンガー・ホーム商会 (Holme Ringer & Co.) に入った。この商会はグラヴァー商会に代わって長崎対外貿易を独占するようになった。1875 年、同商社の神戸支店長となったが、同支店の経営に失敗し、再び退社した。独立して、ジャーディン・マセソン商会の代理店を営み、一時は高島炭坑の利権を扱ったが、晩年は不遇であった (犬塚孝明前掲書、32 頁)。

14) 閏 5 月 15 日以降、ウィリアムソンの紹介でバルリーとグレインという 2 名の教師が加わったが、そのグレインとは、森有礼と高見弥一が寄宿したロンドン大学化学教授のグレインと思われる (犬塚孝明前掲書、76 頁)。

15) Oliphant, L., *Narrative of the Earl of Elgin's mission to China and Japan in the years 1857, '58, '59* (1859) (岡田章雄訳『エルギン卿遣日使節録』雄松堂書店、1968) を書いたが、この本によりアーネスト・サトウ (Ernest Mason Satow, 1843-1929) が来日の決心をしたことはよく知られている (萩原延壽『遠い崖—アーネスト・サトウ日記抄—』第 1 巻、朝日新聞社、1998、97 頁)。

学頭の町田民部を除くと、村橋は海軍、後に陸軍学術を、名越は陸軍大砲を、畠山は陸軍築城を、町田清蔵と磯永は造船を、町田申四郎と東郷は機械学（海軍機械術）を、吉田、市来、高見、森は運用測量機関（海軍測量術）を、中村は文理医学を、田中は医学・物産を、鮫島は英学を、後に文学を学ぶことになった。しかし、15歳の町田清蔵と14歳の磯永は幼少ゆえに、専門的な学習は猶予された<sup>16)</sup>。

幕府の派遣の場合には<sup>17)</sup>、慶応2（1866）年4月8日に海外渡航を認める布達にもとづく最初の正式な海外派遣であった。従って、その準備には外交ルートが用いられ、在日全権公使パークス（H.S.Parkes, 1828-85）が計画立案の段階から全面的に協力した。その年の8月には、開成所で80名程度集まったイギリス留学希望者に選抜試験が行われた。その結果、選ばれたのは、市川盛三郎、岡保義（伊東昌之助）、億川一郎、杉徳次郎、外山捨八（正一）、成瀬錠五郎、林薫三郎（薫）、福沢英之助（和田慎次郎）、箕作奎吾、箕作大六（菊池大麓）、安井真八郎、岩佐源二の12名であった。9月には取締役に中村敬輔（正直）と川路太郎（寛堂）が選ばれた。

パークスの推薦を受けて留学生の世話人となったのが海軍附牧師のロイド（W.V.Lloyd, 1825-96）であった。彼はパブリック・スクールの一つであったシュルーズベリー（Shrewsbury School、1552年創立）卒業後ダブリン大学のトリニティ・カレッジを卒業、聖職者となった。1858年に海軍附牧師となり、1866年から68年にかけて幕府派遣留学生の世話人を引き受けた。パークスに提出されたロイドの留学生教育計画は「イングランドにおける日本人留学生の教育」と「イングランドにおける若い日本人の宿泊代、住み込み家庭教師の手当て、授業料およびその他の必要経費」という覚書に窺うことができる。前者によれば、留学先はロンドン大学が指定されており<sup>18)</sup>、入学資格につい

16) その後の海外での生活の詳細については、犬塚孝明の前掲書を参照のこと。

17) 以下の記述については、原平三「徳川幕府の英国留学」（『歴史地理』第79巻第5号、1942）、および藤井泰「幕府イギリス留学生に関する一考察—世話人・W.V.Lloydを中心として—」（『日本教育史研究』第9号、1990、44-61頁）、倉沢剛「幕末のイギリス留学」（『幕末教育史の研究』第2巻、吉川弘文館、1984）を参照した。

18) 藤井はオックスブリッジとは異なり「カリキュラムの中に医学、科学・工学などを初めとする実

でもエディバラ大学の事例を参照している。その中で、ロンドン大学にはユニバーシティ・カレッジとキングス・カレッジとがあり、ある程度英語が出来るようになるまで、パブリック・スクールであるユニバーシティ・カレッジ・スクール（1830年創立）、キングス・カレッジ・スクール（1831年創立）に入学させることが提案されていた。後者では、ロイド自身が留学生の後見人兼家庭教師になることを前提に、カレッジ・スクールの授業料・家庭教師手当・生活費などが提案されていた。

英語教育は乗船したイギリス郵船「ニポール (Nipol)」船内で始まり、年長の中村敬輔、川路太郎、安井真八郎、岩佐源二の学力の進歩は遅く、箕作兄弟は外国人と英語で会話できるようになっていった。ロンドン到着後、ホテル住まいを切り上げ、セント・ジェイムズ・パーク側のランカスターゲート16番にロイドの家族ともども生活をするようになった。ここで英語・数学、さらに物理学・化学などをロイドおよび雇用された家庭教師モルトベイ (Edward Moltebey) から教えられた。このような教育にもかかわらず、日本人同士の生活から英語の進歩が妨げられるとの意見から、ロイドの反対を押し切って10名が分宿し、ここに留学生とロイドとの亀裂が生まれた。しかし、パークスから事態を知らされた幕府は、ロイドを支持し、結局ほぼ4ヶ月後にはロイド宅に戻った。12月初めに、中村と川路は、年齢のこともあり、独学で勉学に励むこととなったが、他の留学生は、最年長の岩佐で23歳、最年少の箕作大六で12歳、平均年齢18歳であり、平均年齢25歳であった土佐藩留学生や平均年齢21歳の薩摩藩留学生とは異なり、まず計画通りユニバーシティ・カレッジ・スクールに入学し、その後ユニバーシティ・カレッジに進学した<sup>19)</sup>。しかし、幕府の瓦解により帰国令が出され、慶応4(1868)年閏4月24日(6月14日)にパリに到着、6月に帰国した。

---

学的学科目を導入しており、幕府留学生の目的に相当であると判断されたものと」推測している(藤井泰前掲論文、49頁)。

19) 藤井泰によれば「ユニバーシティ・カレッジのアーカイブズを調査した結果、その中に川路、中村そして岩佐を除く11名の幕府留学生の名前を発見した」(藤井泰前掲論文、55頁)とされ、その典拠は *University College School Register, 1866-1870* (vol.72) であるとされる。

土佐藩の派遣の場合<sup>20)</sup>には、イギリス横浜領事代理のラウダー (J.F.Lowder, 1843-1902) は「法廷弁護士の資格を取るために、賜暇を貰って本国に戻るようになっていた」。この帰国に際して、横浜で同船することになった真辺戒作、国沢新九郎、深尾貝作、松井正水、馬場辰猪の 5 名の土佐藩士の身柄を引き受けたのが、このラウダーであった。これら「5 人の土佐藩学生がロンドンに到着したのは、明治 3 年 (1870) 9 月下旬である」。彼らが旅装を解いたチャーリング・クロス・ホテルに迎えに来たのがダニエル (J.J.Daniell) であった<sup>21)</sup>。彼らは、この「ダニエルという牧師に連れられて、ロンドンの西方約百キロの、ヴィルトシャー州の町チペナム (Chippenham) の郊外のキングトン・ラングレー (Kington Langley) という小村に移り、ここでイギリス最初の 6 ヶ月を過ごすことになった」。実は「この〈1860 年〉頃ラウダーとその母〈1863 年頃、彼女は駐日公使オールコックと再婚していた〉が身を寄せていた先が … このダニエルの家であった。ラウダーの父親はイギリスの上海領事館所属の牧師であった」からである。この「ラウダーは、明治 5 (1872) 年に法廷弁護士の資格を取ると、まもなくイギリス外務省を辞任し、… 今度は『お雇い外国人』のひとりとして、横浜税関の法律顧問とつとめることになる」人物であった。このことから推察すると、幕府派遣のイギリス留学生と同様、ロンドン大学への入学を世話することになったのは、オールコックとその部下であったラウダーであったと考えられる。もっとも、ユニバーシティ・カレッジに入学したのは、真辺戒作と馬場辰猪であり、両者とも留学目的は法律であった<sup>22)</sup>。

20) 萩原延壽『馬場辰猪全集』編集余録、『大久保利謙歴史著作集』第 6 巻月報、吉川弘文館、1988。

21) キングトン・ラングレーに立ち寄ったキルバート (Francis Kilbert) の *Kilbert's Diary* によれば「ダニエル夫人が、預かっている 5 人の日本人生徒のことを話してくれた」。「ダニエル夫妻がかれらのことを頼まれたのは、非常に唐突なものであったらしく、かれらをイギリスに連れてきたフレッド・ラウダーは、その航海の途上でダニエルに手紙を書き、かれらを引き受けてくれと頼んできたそうである」(萩原延壽前掲論文、6 頁)。

22) 本論文の留学生に関する書誌的情報は、井上琢智「幕末・明治・大正期イギリス日本人留学生資料」(1)・(2) (『経済学論究』第 56 巻 4 号〈2003 年 3 月〉、第 57 巻第 1 号〈2003 年 4 月〉) に拠っている。



## II. ユニバーシテ・カレッジ教授ウィリアムソンと日本人留学生

幕末・明治初期にあつて、多くの日本人留学生を引き受けたのは、ロンドン大学、それもユニバーシティ・カレッジであつた。その理由として考えられるのは、第一に宗教上の理由、第二に教育上の理由が挙げられる。前者については、オックスブリッジは、イギリス国教会の教徒にのみ開かれており、非国教徒の入学を可能とする信仰告白の廃止は、1871年であつた。それに対して、ユニバーシティ・カレッジは、ユニテリアンを含む非国教徒のための高等教育機関として、1826年に創立され1828年に開校された学校であつた。その上、オックスブリッジの教育が年額200-250ポンドを必要とする貴族や富裕な上流階級のための学校で、全寮制を原則とし、古典主義にもとづくカリキュラムが中心であつたのに対して、ユニバーシティ・カレッジは、25-30ポンド程度の授業料の中産階級のための学校であり、通学制を原則とし、そのカリキュラムも19世紀の科学主義運動に対応した、まさに中産階級の人々が必要とする実践的な科学・医学・技術教育を目標とする高等教育機関であり、法文学部 (Faculty of Arts & Laws)、医学部 (Faculty of Medicine) および病院を擁し、1870年にはウィリアムソンの努力により理学部 (Faculty of Science) を新設した大学で<sup>23)</sup>、ベルリン大学の創立に関与したフンボルト (K.W. von Humboldt, 1767-1835) のネオ・ヒューマニズムの影響を受けた大学であつた。加えて、オックスブリッジのように入学に際して、ギリシア語やラテン語の試験が課せられることのない大学であつた。従つて「ユニバーシティ・カレッジは、イギリス人にとって開放性をもつ大学であつたと同時に、日本の留学生にとつても、就学の機会をえられやすかつたし、また、西洋の科学・技術の教育を修める高等教育の場として、このカレッジがもっともふさわしかつた」<sup>24)</sup>のであつた。

23) H.Hale Bellot, *University College, London 1826-1926*, 1929, p.307.

24) 1826年設立され、1828年にロンドンのガワーストリートで開校した学校で、ユニバーシティ・カレッジと命名されたのが、1836年である。やや遅れた1831年にトーリーや国教会がそれに対抗して創立されたのが、キングス・カレッジである (石附実前掲書、45-46頁、井上琢智前掲書、26-27頁)。

長州・薩摩の留学生が在籍した頃のユニバーシティ・カレッジの学長は、ラテン語学の研究者として著名なキー (T.H.Key, 1799-1875) であり、その三女エマ・キャサリンと結婚していたのがウィリアムソンであった<sup>25)</sup>。彼は 1824 年 5 月 1 日、ロンドン郊外のワンズワース (Wandsworth) に生まれた。兄弟は、姉一人、若くして死んだ弟との三人であった。東インド会社の事務員であった父は、1831 年には、ブライトンからロンドンのケンジントンにあるライト・レーン (Wright's Lane) に家を買ひ、そこに移った。ここで暮らしている際、若きウィリアムソンは東インド会社のインド通信審査部長で父ウィリアムソンの上司であったジェームズ・ミル (J.Mill, 1773-1836) の子どもたちと親密になった。その中の一人がジョン・ミル (J.S.Mill, 1806-73) であった。

父ウィリアムソンは、上司であった父ミルと親交を結び、彼の政治的・宗教的・教育的な見解を共有するようになっただけでなく、グロート (G.Grote, 1794-1871)、ベイン (A.Bain, 1818-1903)、ブルーム (H.P.Brougham, 1778-1868) などとの交流の広がりによって、「スコットランドの科学的研究の精神」を身に着けるに至り、ユニバーシティ・カレッジの創立運動にも参加するようになった。

ウィリアムソン自身は、このような父の影響を受けて、1840 年には 16 歳でドイツに渡り、ハイデルベルグ大学に入学した。さらに 1844 年には当時ヨーロッパの化学の研究センターとなっていたギーセン大学に移り、哲学者・文学史家の教授で自由主義者であったヒレブランド (J.Hillebrand, 1788-1871) 宅に住み、夫婦の世話を受けながら、応用科学のリービヒ (J.Libig, 1803-73) などから化学を学んだ。1846 年 8 月ギーセンを発ち、パリに立ち寄った。これは、哲学者コント (A.Comte, 1798-1857) のもとでより進んだ数学を学ばせるようにという、ジョン・ミルの父ウィリアムソンを通じての助言の結果であった<sup>26)</sup>。ウィリアムソンは、コントから週一回 3 時間の数学の講義を聞きくとともに、コントの実証哲学に関心を抱いた。もちろんそのパリで彼は

25) 犬塚孝明前掲書、102 頁、77 頁。

26) *Earlier Letters, 1812-1848, Collected Works of John Stuart Mill*, vol.13, 1963, p.668.

自宅に実験室を設け、さらにはフランスの著名な化学者と交流した。3年間の滞在の後、ウィリアムソンは1849年6月にロンドンへ戻った。それは49年初めに、化学教授でロンドン化学協会の初代会長グレーアム (T.Graham, 1805-69)<sup>27)</sup>から、ユニバーシティ・カレッジの「分析・応用化学教授」職に応募するよう薦められたからであった。1849年6月16日、彼は物理学の能力に疑念がもたれたために「応用化学教授」として就任することとなった。10月から新しい仕事に就いた<sup>28)</sup>。「帰国後、1850年にアルコールの脱水によるエーテル反応の機構を解明して分子構造理論の発展に大きな影響を与えていた」<sup>29)</sup>。1855年にはグレーアムの後継者として純粋化学の教授 (-87) となった。それらの業績ゆえに、彼は、1855年には王立協会 (Royal Society) のフェローに選ばれたり、1873年にはイギリス科学促進協会 (British Association for the Promotion of Sciences) のB部会 (Chemical Science and Mineralogy) の議長を務め、1863年から65年および1869年から71年にかけて化学学会 (Chemical Society) 会長に推されている。

ドイツ留学中に大学教員の自宅で下宿生活をした経験のあるウィリアムソンが、長州藩の5人の日本人留学生の世話を引き受けるたのには以下の事情がある。この話を持ち込んだのは、ユニバーシティ・カレッジの評議会のメンバーの一人であるプレヴオスト (Prevost, 後の Sir Augustus) であった。その仲介をしたのが、すでに指摘したように、マセソン商会のヒュー・マセソンであった。このウィリアムソンと日本人留学生との出会いこそが「日本とヨー

27) このグレーアムは、ジェヴォンズの次兄ハーバートのユニバーシティ・カレッジ医学部時代 (1850-51) の化学の教師であり、後にジェヴォンズ自身も学ぶことになった教師であり、1836年にはすでに王立協会の会員に選ばれ、1855年から69年まで造幣局長官を務めており、ジェヴォンズのオーストラリアのシドニー造幣局への就職も彼の世話によるものであった (井上琢智前掲書、16頁、27-28頁)。

28) ウィリアムソンの略伝については、以下の文献を参考にした。J.Harris and W.H.Brock, "From Giessen to Gower Street: Towards A Biography of Alexander William Williamson (1824-1904)," *Annals of Science*, 1974, vol.31, no.2, pp.95-130, G.Carey Foster, "Alexander William Williamson. Born May 1st, 1824; Died May 6th, 1904," *Journal of the Chemical Society*, 1906, vol.87, pp.605-18. 犬塚孝明前掲書、77頁 (略歴に多少の誤りが含まれている)。

29) 塚原徳道『明治化学の開拓者』三省堂、1978、58頁。

ロッパの科学との真の出会いであり、1863 年の 11 月であった。これら若き日本人は生命の危険をものともせず、母国を離れ、… ヨーロッパの科学と文化を体系的に学ぶためにイギリスへやってきた。その中の 3 人が彼の自宅に下宿した。その二三年後、薩摩藩主からウィリアムソンの指導の下で学ぶために 16 人の長州より若い留学生が送られてきた<sup>30)</sup>。マセソンは、最後までイギリスに残った野村と井上勝が 1886 年 11 月に帰国する際、ウィリアムソンの家族ぐるみの指導に対して、「二人の若者は、貴方が二人の学習時間をうまく導いて、最初に徹底的に基礎的学習をするようにさせてことの恩義を深く感じております<sup>31)</sup>」との謝辞を書いたという。

ウィリアムソンと日本との関わりは、幕末の日本人留学生の直接的な世話だけに留まらなかった。ユニバーシティ・カレッジの化学教授としての彼の教え子やその周辺には、次世代の日本人留学生を教えることになったイギリス人がいた。例えば、1848 年ユニバーシティ・カレッジのグレーアムおよびウィリアムソンのもとで化学を学び、1855 年にヘイデルベルグのブンゼン (R.W.Bunsen, 1811-99) のもとへ留学、57 年に帰国し、マンチェスターのオウエンズ・カレッジの化学の教授となったロスコー (H.E.Roscoe, 1833-1915)<sup>32)</sup>である。彼は

30) G.Carey Foster, *oc. cit.*, pp.616-17.

31) 三好信浩『ダイアラーの日本』福村出版、1989、36 頁。なお、この謝辞については、*Annals of Science* (vol.31, no.2, 1974, p.124) を参照のこと。安田弘「文明開花 知られざる恩人◇博文らを援助、近代化に貢献した英国人」(『日本経済新聞』1986.7.1 夕刊)によれば、H. マセソンには『回想録』があり、日本人との交流が描れているという。ところで、『東洋学芸雑誌』(第 189 号、1897 年 6 月)はウィリアムソンの近況について「同博士は本邦の文明には大なる関係を有する人にして伊藤侯井上伯爵故森子(爵)等の曾て英国に留学されたる時は同博士の家に寓し其世話を受けられ… 同博士は唯に化学者なるのみならず各国の政体に通じ国家経済の事に就きても卓見を有する人なり」と書いて後、桜井錠二が書いた紹介状を携えウィリアムソンを訪ねた大蔵大臣秘書官早川千吉郎の返書を掲載した。それによれば「ササガ大家丈あり老年に被成侯得共尚元氣十分に有」と(277 頁)。また、Y.Yamamoto “Inoue Masaru – ‘Father’ of the Japanese Railways,” I.Nishi (ed.) *Britain & Japan – Biographical Portraits*, vol.2, 1997 も参照のこと。

32) ロスコーの伝記については、さしあたり “The Right Honourable Sir Henry Enfield Roscoe, Born January 7th, 1833; Died December 18th, 1915,” (*Journal of Chemical Society*, no.109, 1916, pp.395-424) および、Roscoe, H., *The Life and Experiences of Sir Henry Enfield Roscoe, D.C.L., LL.D., F.R.S.*, 1906 (2002), pp.113-15 を参照

「ブンゼン=ロスコーの法則」で知られる光化学反応の共同研究者として知られた化学者であり、杉浦重剛や市川盛三郎<sup>33)</sup>を教えた。杉浦は「〈ロスコー〉先生は非常に大きな体格で、我国の相撲取りの如くであるが、至極穏やかなる面で、先づ豊偉とでも掲揚すべき風采で、どことなくユツタリして居られる人… 自重信心の深い老練家で… 独り理科に於てのみならず、諸科の教授中に於ても徳望の高い人であった。学校のことには尽力するのは勿論、公共工事にも色々と力を致された」<sup>34)</sup>。

また、来日直前までユニバーシティ・カレッジでウィリアムソンの助手をしていたアトキンソン (R.W. Atkinson, 1850-1929)<sup>35)</sup>は、東京開成学校最初

---

のこと。また、ロスコーと日本との関わりについては、さしあたり渡辺英雄「化学者ロスコーと日本へのかかわり」(『英学史研究』第14号、1981、131-42頁)を参照のこと。この論文で紹介されている日本人は、杉浦重剛、久原躬弦であるが、久原はアメリカのジョーンズ・ホプキンズ大学へ留学した。なお、渡辺によれば、*Lessons in Elementary Chemistry* が、東奥義塾、大阪開成所、岡山変則中学校、英和学館(三重)などで教科書として使われたという(142頁)。ロスコーとジェヴォンズについては、井上琢智前掲書、第1章第2節「ジェヴォンズ家の人びと」を参照のこと。

- 33) 市川(平岡)盛三郎の伝記については、さしあたり原平三「市川盛三郎」(『伝記』第9巻第3/4号、1942)および杉浦重剛「市川盛三郎略伝」(『東洋学芸雑誌』第14号：『杉浦重剛全集』第1巻、577-79頁に採録)を参照のこと。市川盛三郎もまた1877年10月から物理学を学ぶ目的でオウエンズ・カレッジに留学し、杉浦と市川の二人は同宿で寝起きした。帰国後、開成学校教員時代に Science Primers シリーズの一冊であった *Chemistry* (1873) を『ロスコー氏撰 市川盛三郎訳 小学 化学』として邦訳し、二書房出版から1889(明治22)年に出版した。また、ロスコーの化学書は明治時代だけで再版なども含め少くとも16冊出版され、*Chemistry* もその原書が東京で2回出版されている(『国立国会図書館蔵書目録 明治期』紀伊國屋書店、1994)。
- 34) 『杉浦重剛全集』第6巻、674頁。なお、杉浦重剛のイギリス留学時代については、藤井清久「英国留学時代の杉浦重剛」(『科学史研究』II-87巻、1968)および渡辺克夫「杉浦重剛の英国留学(一)(二)」(『日本学園高等学校研究紀要』第4・5集、1988〈7-15頁〉、1989〈44-82頁〉)を参照のこと。なお、杉浦は、帰国後ロスコーを数回にわたって紹介する論稿を『東洋学芸雑誌』に投稿した。オウエンズ・カレッジで杉浦は、示色染料・指示薬である「オーリン(ロゾール酸)」を研究し、1876年7月の学期末試験で一番の成績をとり、文部省にも報告された。彼は共同論文を含め7編の化学論文を発表し、著名な科学雑誌 *Nature* (1882) に“On the Isomerism of Albuminous Bodies” (27-103) を公表するなど活躍した。これらは『杉浦重剛全集』(第3巻、901-942頁)に再録されている。
- 35) アトキンソンについては、上野益三「ロバート・ウィリアム・アトキンソン」(『お雇い外国人3 自然科学』鹿島出版会、1968)、渡辺正雄『日本人と近代科学—西洋への対応と課題—』(岩波新書、1976)、友沢淳二「アトキンソンによる日本酒醸造の研究」(『科学史研究』75号、1965)、

の化学教師であるアメリカ人グリフィス (W.E.Griffis, 1843-1928)<sup>36)</sup> 帰国後、1874 年 9 月から化学教師に就任し、1877 年開成学校が東京医学校と合併して東京大学となつてからも理学部化学科教員として 1881 年 7 月まで勤めた。彼の担当は、分析化学および応用化学であつた。彼もまた、ユニバーシティ・カレッジ・スクール、ユニバーシティ・カレッジを経て、ロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・ケミストリと王立鉱山学校で化学と鉱山学も学んだ人物であつた。彼は松井直吉、長谷川芳之助、南部球吾、宮崎道正、久原躬弦、高須碌郎、西村貞らに加えて、第二回文部省留学生 (1876 年) としてイギリスへ留学した杉浦重剛や桜井錠二<sup>37)</sup>をも教えた。このように考えるとき、ユニバーシティ・カレッジのウィリアムソンは、その教え子を中心とするユニバーシティ・カレッジ・コネクションの中心にいた人物であり、その人脈を通して日本の「近代化」を促進する上で重要な役割を果すことになる分析化学者や応用化学者をユニバーシティ・カレッジやその同門であるオウエンズ・カレッジで直接的・間接的に育てたのである。

---

高松豊吉「余が受けた明治時代の教育」(『明治文化の記念と其の批判』大日本文明協会、1925) 塩川久男「R.W. アトキンソン—生涯と彼による上水水質分析について—」(『化学史研究』第 6 号、1977) を参照のこと。また、塚原徳道前掲書『明治化学の開拓者』第 3 章も参照のこと。塚田によれば、アトキンスは純正化学と応用化学とを平等視しており、それは、彼自身の業績である “The Chemistry of Sake Brewing” (*Memoirs of the Science Department*, 東京大学理科大学、1881) からみても明らかだという。

36) グリフィスを含むラトガース大学出身のアメリカ人と日本との交流については、さしあたり、*The Modernizers-Overseas Students, Foreign Employees, and Meiji Japan*, ed. by Ardath W.Burks, 1985 (梅溪昇監訳『近代化の推進者たち—留学生・お雇い外国人と明治—』思文閣出版、1990)。

37) 桜井については、さしあたり『男爵桜井錠二遺稿—思出の数々—』(九和会、1914) を参照のこと。なお、1878 年文部省第二回派遣留学生桜井がウィリアムソンから受けた影響を示す好例がある。すなわち、東京大学から帝国大学へ改組される際に問題となった化学実験所問題 (1871 年に第一回官費留学生(医学)としてドイツのベルリン大学のホフマンのもとで有機化学を学んだ長井長義はドイツ流の研究センターの実験所を構想したのに対して、イギリス流の教育センターの実験所を構想していた桜井との対立問題) で、議論になった点がウィリアムソンの原子・分子説に関わる。廣田綱蔵によれば「君<桜井>の恩師ウィリアムソン教授などは、原子があるとかないとかの机上空論をしているが、研究費がないためだろう」として、研究重視こそがドイツの化学がイギリスのそれを追い抜いた理由だと指摘したという (廣田綱蔵『明治の化学者—その抗争と苦渋—』東京化学同人、1988、5 頁)。

ここで注目すべきは、留学直後ウィリアムソンに学んだ山尾庸三と野村弥吉の動きである。「山尾と野村(井上勝)の二人が最後まで残り、科学の原理を学ぶことによりかなりの上達を示し、かつそれを産業面に応用することの実務経験を得た。山尾は(ユニバーシティ・カレッジで学んだ後)ネピア造船所にやって来て、グラスゴウのアンダーソンズ・カレッジの夜学に出席した」<sup>38)</sup>。帰国後、山尾は1869年末明治政府に出仕し、1865年フランスの強力な後押しで設立した造船所である横須賀製鉄所の事務総括を命じられた。山尾はフランス人首長ヴェルニー (F.L.Verny, 1837-1908) によるパリのエコール・ポリテクニク計画を変更して「英名スクール」「英名コウレージ」を計画し、実現しようとした。これが山尾のグラスゴウでの留学経験の反映であり、工部大学校の基本計画となった。1871年、この工部大学校計画を上申した山尾は、留学生仲間であった伊藤博文の岩倉使節団への同行を契機に、H. マセソンに工部大学校教師の人選を依頼することになった。

ロンドンの到着後、伊藤は随員で1866年から1868年まで幕府のイギリス留学生としてユニバーシティ・カレッジ・スクールに在籍経験のある林董をマセソンに遣わした。彼の後日談によれば「今は日本政府の要人となっている者たちの世話をしたことがあります。…彼らは、工部省の仕事を立派にやれる青年を養成するための学校を首都東京開設することについて、私に援助を求めて来たのです」<sup>39)</sup>。このようにして選ばれたのがダイアーであり、来日後、彼が山尾と同時期にアンダーソン・カレッジの夜学に通っていたことが分かり、二人の関係は親密になったという。山尾が工部大学校創立に際してお雇い外国人の人選をマセソン=ウィリアムソン・コネクションではなく、マセソン=グラスゴウ・コネクションを選び、その後のスコットランド・コネクションの形成とその発展の基礎を作ることになったのは<sup>40)</sup>、きわめて合理的な選択であった。すなわち、分析化学・応用化学ではなく、造船・機械などの工学研究

38) 三好信浩前掲書、35頁。

39) 三好信浩前掲書、40頁。

40) スコットランド・コネクションの形成とその発展については、北政巳『国際日本を拓いた人々ー日本とスコットランドの絆ー』(同文館、1984)を参照のこと。

とその実用化の模範国は、フランスではなく、イギリスであり、そのイギリスであっても、メカニック・インスティテュートの伝統をもつスコットランドであって、その伝統が移植されたイングランドではないという事実<sup>41)</sup>を、イングランドとスコットランドとの留学経験をもつ山尾であったからこそできた正しい判断であったということである。

このような判断は、その後の文部省の派遣留学生の留学先決定にも生かされている。例えば、第一回文部省留学生としては、9人がアメリカに、1人がフランスに、1人がドイツに留学した。例えば、法学を学ぶために、三浦（鳩山）和夫（コロンビア大学）、小村寿太郎（ハーバード大学）、斎藤修一郎、菊池武夫（ボストン大学）、鉱山学を学ぶために松井直吉、長谷川芳之助、南部球吉（コロンビア大学）へ留学した。第二回文部省派遣留学生として、先に指摘したように化学を専攻した桜井錠二はユニバーシティ・カレッジへ、杉浦重剛はオウエンズ・カレッジへ、工学を専攻した関谷清景はユニバーシティ・カレッジへ留学したものの、増田礼作と谷口直貞はグラスゴウ大学へ留学した。その他、法学を専攻した穂積陳重、向坂兌、岡村輝彦はともにユニバーシティ・カレッジとロー・スクールであるミドル・テンプルへ留学した。

ウィリアムソンを軸とするユニバーシティ・カレッジ・コネクションは、このような自然科学・自然科学教育の分野だけでなく、経済学の分野にもその影響力を持つようになった。その人物がジェヴォンズ（W.S.Jevons, 1835-1882）である。彼はロスコーの従兄弟であり、彼とほぼ同じ道筋を辿る形で、リヴァプール高等職工学校からユニバーシティ・カレッジ・スクール、そしてユニバーシティ・カレッジでウィリアムソンやグレーアムから化学を学び、その後、シドニーの造幣局の分析官を務めたオーストラリア時代に経済学者へと転向したのである。帰国後経済学を学び、*The Coal Question*（1865）の出版と評判から経済学者と認められたジェヴォンズは、従兄弟ですでにオウエンズ・カレッジの化学の教授となっていたロスコーの勧めで、そのオウエンズ・カレッジの

41) この点については、さしあたり三好信浩「イギリスにおける工業化と教育の歴史的関連の考察—万国博の教育史の意義を中心に—」（『社会経済史学』第 40 巻第 5 号、1975、35（447）-40（48）頁）を参照のこと。



経済学の教授となっていた。1876年10月にユニバーシティ・カレッジへ転出した後、当時同大学へ留学してきた三宮義胤、大越成徳、山辺丈夫、河上謹一ら7人の日本人留学生を教えたのである<sup>42)</sup>。

このジェヴォンズはまた『ロスコー氏撰 市川盛三郎訳 小学 化学』の原書であった *Chemistry* (1873) と同じ Science Primers シリーズの1冊として *Political Economy* (1878) を書いたが、この翻訳は、安田源次郎訳『倭氏経済論』(上冊、1882)を皮切りに、経済学の導入期である明治20年代までに部分訳も含めて4度にもおよび、日本における経済学教育の入門書として広く普及・利用された。また、同シリーズの論理学書であるジェヴォンズの *Logic* (1876) は、戸田欽堂訳『論事矩』(3巻2冊、1879)を皮切りに、明治20年代までに3度邦訳されただけでなく、茂木春太訳・平岡盛三郎校閲『羅斯珂氏化学』(1876-83)の原書であるロスコーの *Lessons in Elementary Chemistry* (1869) と同じシリーズである *Elementary Lessons in Logic* (1870) の邦訳もまた、イギリス幕府留学生であった菊池大麓の邦訳『論理略説』(3巻、1882-84)とケンブリッジ大学留学生であった添田寿一の邦訳『惹穩氏論理新論』(1883)として2度にわたり邦訳され、日本における論理学教育の教科書として広く普及・利用された<sup>43)</sup>。

### III. ユニバーシティ・カレッジ留学生の実態<sup>44)</sup>

すでに指摘したように国教会系のオックスブリッジに対抗するために1826年創立され、82年に開校したユニバーシティ・カレッジとこのカレッジに対抗するために1829年に創立されたキングス・カレッジとは、1836年になって

42) これら日本人留学生の軌跡については、井上琢智「近代経済学導入の一齣— W.S. ジェヴォンズと7人の日本人留学生—」(『大阪商業大学論集』第54号、1979)を参照のこと。

43) ジェヴォンズの著書 *Political Economy* (1878)、*Logic* (1876)、*Elementary Lessons in Logic* (1870) の邦訳史については井上琢智「W.S. ジェヴォンズ経済学の導入— *Primers of Political Economy* の邦訳史—」(『大阪商業大学論集』第57号、1980)、「W.S. ジェヴォンズ論理学の日本への導入」(『大阪商業大学論集』第58号、1980)を参照のこと。

44) 以下の留学生資料については、井上琢智前掲論文「幕末・明治・大正期イギリス日本人留学生資料(1)(2)」を参照のこと。

学位授与機構としての連合体であるロンドン大学となった。そしてこれら各カレッジには、中等教育の場としてパブリック・スクールを有していた。それが、ユニバーシティ・カレッジ・スクールであり、キングス・カレッジ・スクールであった。日本人留学生もまたその年齢や学力に応じて、カレッジに進学する前にこれらスクールの所属した。以下では、これらスクールとカレッジに所属した留学生の実態と帰国後の軌跡を明らかにする。

#### 1) ユニバーシティ・カレッジ・スクール留学生<sup>45)</sup>

ユニバーシティ・カレッジ・スクールへのおそらく最初の留学者は、1866 年から 68 年にかけて、幕府から派遣された留学生であった平岡（市川）盛三郎、岡保義（伊東昌之助）、億川一郎、杉徳次郎、外山捨八（正一）、成瀬錠五郎、林董三郎（董）、福沢英之助（和田慎次郎）、箕作奎吾、箕作大六（菊池大麓）、安井真八郎の 11 名であった。

幕府の瓦解で帰国した留学生の軌跡を追うと、平岡、億川が大阪造幣寮（局）に関わっていることが分かる。まず、平岡は、最初開成学校教授補となり、同校の分校とでもいうべき大阪舎密局に勤め、さらにその舎密局と洋学校とが合併して創立された大阪理学所勤務となり、その学校で化学の教師ハラタマ（K.W.Gratama, 1831-88）の後任リッテル（H.Ritter, 1827-74）を助け、その講義を邦訳し『物理日記』（1874, 1878）『化学日記』（1874, 1877）を著わした。その後、再び東京開成学校に務めて後、1877 年から 79 年にかけて杉浦重剛と同宿しながらオウエンズ・カレッジで物理学を学び、帰国後、東京大学理学部講師となった。億川は、帰国後尼崎藩洋学教師となり、その後大阪理学所を経て大蔵省紙幣寮勤務となり、舎密局長となった。造幣局に直接関わったことはないものの、岡もまた帰国後東京開成学校に勤めて後、鉾山寮権助となっている。

---

45) このユニバーシティ・カレッジ・スクールの日本人留学生についての同カレッジ・スクール側の授業料納付記録、在籍名簿、卒業生名簿などに基づいた調査については、藤井泰が幕府イギリス留学生についてはそれを行っているが、幕府留学生に限定されており、他の留学生については未だまったく進んでいない。この点では、キングス・カレッジ・スクールについての調査はまったく進んでいない。

外務省に関わった留学生には、外山、林董三郎がいる。外山は帰国後静岡学問所の教授となり、後に外務省に移り、赴任先のアメリカで1870年から76年にかけてミシガン大学で、化学や哲学を学んだ。帰国後東京開成学校教授となり、平岡の同僚となった。東京大学創立後は、心理学や英語を担当し、H. スペンサーを紹介し<sup>46)</sup>、他方で『新体詩抄』を刊行するなど活躍し、日本最初の文学博士となった。林董三郎は、帰国後箱館戦争で幕府のイギリス留学生であった榎本武揚軍に参加したが、明治政府に入ってから後は、香川県知事などを経て、外務次官となり、日英同盟締結時の駐英公使であった。その後、外務大臣、通信大臣などを歴任した。

帰国後、教育に携わった留学生の内、箕作大六（大麓）は1870年から77年にかけて再びユニバーシティ・カレッジおよびケンブリッジ大学のセント・ジョーンズ・カレッジ（St. John's College, 確認在籍：1873-77）に在籍し、数学・物理学を学び、帰国後菊池家を継ぎ、東京大学教授となり、純正数学・応用数学を教え、さらには文部次官、帝国大学総長を経て、文部大臣となった。その在籍中、専門学校令を公布するなど、明治期における典型的なエリートの一人に数えられる。

その兄箕作奎吾は帰国後、大学中助教、大助教、少博士となった後、職を辞して、私塾を開いたが、20歳で死亡した。杉は帰国後静岡県学問所勤務を経て沼津兵学校教員となった。また、福沢英之助は帰国後岡山の中学校教師となった経験があるが、留学の応募に際して福沢諭吉の弟として応募したことからも分かるように、明治10年代には福沢に関わった『郵便報知新聞』の社員となっている。

その他、成瀬や安井のように、帰国後旧藩主に従い静岡へ赴任したが、その後の消息は不明になった留学生がいる。また、現在確認が出来ている在籍者としては、1870年頃から82年頃にかけて、ユニバーシティ・カレッジ・スクールからユニバーシティ・カレッジへ進学し、経済学を学んだ小室三吉がいる。

---

46) 日本におけるスペンサーの導入史については、さしあたり山下重一『スペンサーと日本近代』（御茶の水書房、1983）を参照のこと。

彼は帰国後、1884 年に三井物産に入社し、後に香港・上海・ロンドン各支店長を経て、三井物産取締役となった。

## 2) ユニバーシティ・カレッジ留学生

幕末・明治初期に日本の留学先として重要な役割をはたしたユニバーシティ・カレッジへの留学者を、幕末からユニバーシティ・カレッジの日本の近代化に果たした役割が変化が確認できる 1888 年度までに限り、年代別に見ておこう<sup>47)</sup>。

### i) 1864-65 年

1864-65 年の在籍者は 3 名であり、1863-64 年度の在籍者名簿での調査は実施できていないが、1864-65 年の在籍者名簿にその入学初年度が 1863-64 年と書かれているのが山尾庸三（在籍簿名：Yamarou, Y.、確認在籍：1863-64, 1864-65）、遠藤謹助（在籍簿名：End Ko、確認在籍：1863-64, 1864-65）、野村弥吉（井上勝）（在籍簿名：Nomuran、確認在籍：1863-64, 1864-65, 1865-66, 1866-67）の 3 人である。これら長州の留学生の内、山尾はすでに指摘したように、工部大学校創立とその後の運営に大きく貢献した。遠藤謹助は、財政・金融を学び、帰国後、通商権正、造幣権頭、大蔵大丞となり、大阪造幣局の創立に大きく貢献し、大蔵省造幣局におけるユニバーシティ・カレッジ・コネクションの基礎を築いた一人である。また、野村弥吉は、工学とりわけ鉱山学を学び、帰国後、造幣頭兼鉱山正を勤めたが、後に「鉄道の父井上勝」と呼ばれるように、日本の鉄道建設に対して大きく貢献した。

47) 1874-75 年、1877-78 年については、当該年度のユニバーシティ・カレッジ側の『カレンダー』の在籍者名簿および授業料納付記録に基づく調査は未だ出来ていない。そのために当該年度における日本人留学生の実態は不明である。また、条約改正以降大正期までについては、井上琢智前掲資料を参照のこと。なお、以下の人物がこの時期にユニバーシティ・カレッジに留学したという情報があるが、本論文で利用した同大学のカレンダーおよび *Fees Books* からは現在までのところその在籍が確認できていない。小室三吉（1863 (7)-1921.10.18. 滞在:1870?-1882?:ユニバーシティ・カレッジ・スクール→ユニバーシティ・カレッジ）、赤嶺五作 (?-?, 滞在:1871.2-78.6.11:ユニバーシティ・カレッジ）、吉田伴七郎（伴太郎:?-?. 滞在:?-?:ボストン(1870)→ユニバーシティ・カレッジ(1873)）、益田英作（1865.3-?, 滞在:1877:ユニバーシティ・カレッジ）、辰野金吾（1853.8.22.-1919.3.25, 滞在:1880.2.8-83.5:キュービット建築会社、ロンドン大学→ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ, 1886.7.-89.10）、五代龍作（1858.12.28-1938.10.7, 滞在:1882.2.4.-85.5:ユニバーシティ・カレッジ [ケデー(A.Kennedy)に師事]）。

ii) 1865-66年

1865-66年の在籍者は17名であり、その多くが薩摩藩派遣の留学生<sup>48)</sup>であった。その留学生の帰国後の軌跡の違いに従って、具体的に見てみよう。まず、外交官として大きな役割を果たしたのは、鮫島尚信や中村宗見である。鮫島尚信（野田仲平、学籍簿名:Noda、確認在籍:1865-67）は、恩師オリファント（L. Oliphant）下院議員から影響から渡米し、宗教家ハリス（T.L.Harris）のセオ・ソーシャリズム（theo-socialism）の影響を強く受けた。帰国後、外国官権判事、東京府判事、権大参事を経て、外務省設置後は外務大丞となり、日本最初の在外公館がアメリカとイギリスに設置された際には初代弁務使に任命され、日本で最初の外交官となった。その後も外務次官などを歴任し、外交官としての道を歩んだ。また、中村宗見（吉野清左衛門、学籍簿名:Yoshino、確認在籍:1865-66）は、帰国後鹿児島開成所のフランス語教員なり、西郷従道と山県有朋の欧州視察に際して通訳となった。その後、兵部省、工部省、外務省に出仕し、マルセーユ領事、外務大書記官、オランダ・ポルトガル駐劄弁理公使、デンマーク公使となった。

教育の分野で活躍した人物には、森有礼、畠山義成がいる。森有礼（沢井鉄馬、学籍簿名:Savai、確認在籍:1865-66）は、ハリスからもっとも強い影響を受け、彼の勧めに従い、祖国の危急を救うために帰国した。帰国後、徴士外国官権判事に任ぜられ、議事体裁取調御用、少弁務使アメリカ在勤となり、日本最初のアメリカ大使となった。その後も特命全権公使、駐英公使など外交官としての役割を果たして後、文部省御用掛を務めるなど文部行政に関心を移し、初代文部大臣として、帝国大学令、中学校令、小学校令、師範学校令、学位令制定などの教育の制度改革を実行した。また、畠山義成（杉浦弘蔵、学籍簿名:Soogioora<sup>49)</sup>、確認在籍:1865-66, 1866-67）は、ハリスの影響を受けて渡米

48) 薩摩藩の留学生の動向については、主として犬塚孝明前掲書、富田仁『海を越えた日本人名事典』（日外アソシエーツ、1985）等を参考にしながら記述した。

49) 旧畠山義成所蔵で現在国立国会図書館に所蔵されている *University College Calendar* (1865-66) には、印刷された名前に対して修正が加えられている。その筆跡は、すべてが同じわけではないが、畠山のものもあると思われる。カッコ内が修正名である（138-39頁）。①Aysakata (Asakura:Aysigaki), ②Cvaya(Ewaya), ③Haysa(Hashi), ④Massumutta(Matsumtto),

したが、意見の相違から吉田清成、松村淳蔵とともに、ハリスのコロニーから出て、ラトガス大学に入学した。ここで法律、政治など社会科学を学び、修士号を取得した。帰国後、岩倉使節派遣に際して、随員となった。帰国後、文部省五等出仕となり、教育制度の改革に着手し、新装なった東京開成学校初代校長となり、在職のまま文部少丞、中督学となった。森とは教育改革で意見を異にしたが、高等教育の普及と改革に努力した。

大蔵省で理財家として活躍した人物に吉田清成（永井五百助、学籍簿名:Nagai、確認在籍:1865-66, 1866-67）がいる。彼もハリスの影響を受けて渡米したが、意見の相違から畠山義成、松村淳蔵とともに、ハリスのコロニーから出て、ラトガス大学に入学した。ここで経済学を学んだ吉田は、卒業後も銀行保険業務を学び、帰国した。当初、大蔵省に出仕し、各国条約改定御用掛、大蔵少丞、租税権頭となり、岩倉使節に同行し外債募集の任にあたった。その結果、日本で第二回目の外債発行が可能となった。帰国後、特命全権公使としてアメリカ在勤となったが、外務卿井上馨との意見の対立から。農商務大輔に左遷された。彼は商制改革に力を注ぎ、株式会社組織を併用した取引所法の制定を願ったが、それが実際に制定・公布されたのは彼の死後 2 年後であった。

薩摩留学生の当初の目的を実行して軍人になったのが、市来勘十郎（松村淳蔵、学籍簿名:Massumura、確認在籍:1865-66, 1866-67）である。彼もまたハリスの影響を受けて渡米したが、その後ラトガス大学およびアナポリス海軍兵学校へ入学し、一時アメリカ海軍少尉候補生に選ばれた。帰国後、海軍中佐、海軍兵学校第三代校長などを務めた。

殖産興業のために技術者として活躍した人物に田中静洲（朝倉省吾、学籍簿名:Aysakata、確認在籍:1865-66）がいる。彼は、中村とともに、66 年 1 月になってフランスへその留学先を変更した。帰国後、一端鹿児島開成所の語学の教員となったが、お雇い外国人技師のコワニエ（F.Coignet, 1837-1902）が鉱山顧問として雇用された際、会計官鉱山司判事試補に任ぜられ、通訳を兼務し

---

⑤Mattumutta (Matsmula), ⑥Miniami (Minami), ⑦Sevota (Sivota), ⑧Soogioora (Soogiuora), ⑨Suimdsa (Sumids (判読困難)), ⑩Verikasa (Mikasa)

ながら、生野鉦山の再開に努力し、鉦山局長を務め、後進の指導にも従事した。

その「殖産興業」成果を国内外に宣伝するための博覧会事業に大きく貢献したのが町田久成（上野良太郎、学籍簿名:Wooyeno、確認在籍:1865-66）である。帰国後、彼は参与職外国事務掛就任、以後外務大丞を経て、文部省設置とともに文部大丞に転出し、オーストリア博覧会、アメリカ博覧会などの博覧会事務を担当した。その後内務省に転出し、博物館創立構想を建議し、初代博物館局長となった。また内国勸業博覧会事業にも従事した。

帰国後、活躍した分野が異なるとはいえ、活躍した留学生と比べて、帰国後の消息が不明なものもまた少なからずいる。東郷愛之進（岩屋虎之助、学籍簿名:Cvaya、確認在籍:1865-66）は戊辰戦争で戦死している。また、村橋直衛（橋直輔、学籍簿名:Haysa、確認在籍:1865-66）もまた戊辰戦争に参加し、生き残ったにもかかわらず、北海道官有物払い下げ事件の発覚直前に行方不明となり、雲水になり、神戸葺合村で病死した。

また、消息不明者には、町田申四郎（塩田権之丞、学籍簿名:Sevota、確認在籍:1865-66）、高見弥一（松元誠一、学籍簿名:Massumutta、確認在籍:1865-66）、名越平馬（三笠政之助：学籍簿名:Verikasa、確認在籍:1865-66）、町田清次郎（清水兼次郎、学籍簿名:Sumidsa、確認在籍:1865-66）がいる。このように監督、学頭、随員（計4名）を除く薩摩藩留学生14名の内、帰国後日本の近代化のために貢献したのは、6名に過ぎなかった<sup>50)</sup>。

これら薩摩留学生に加えて、長州の井上勝が引き続き在籍している。また、学籍簿名を Miniami と書かれ、1865年から67年にかけて在籍が確認できる留学生がいる。この留学生は、幕末に山口から派遣され、明治初年にはロンドンのチャーリング・クロスの銀行業ブルス兄弟商社の取締役をしていた南貞助（滞在期間：1865.4-67, 1870.11-73）であろう。この南であれば岩倉使節ロンドン訪問に際して、その預金を運用したが、詐欺に会い、その預金の大半は失われたという<sup>51)</sup>。その他に、Mattumutta と書かれている人物が在籍して

50) この薩摩藩派遣には、長崎の堀達之助の子どもで英語通訳として同行した人物堀壮次郎（孝之）がいるが、帰国後の消息は不明である（富田仁前掲書、525頁）

51) 『尾崎三良自叙略伝』(上) 中公文庫、1980、120-29頁。

いるが、詳細は不明である。

iii) 1866-67 年

1866-67 年の在籍者は 6 名であり、前年度から在籍を継続した井上勝、鮫島尚信、吉田清成、市来勘十郎（ただし、その名前は Matsumulla と書かれている）、畠山義成（ただし、その名前は Soogevoola と書かれている）である。その他、名簿には、Miniami と書かれた日本人が在籍している。

iv) 1867-68 年

在籍者は確認できない。

v) 1868-69 年

1868-69 年の留学生は 2 名である。これは、徳川幕府の瓦解による幕府派遣イギリス留学生の帰国の結果である。その 2 名は、狛林之助と藤本磐造である。狛林之助（学籍簿名:Koma, R.、確認在籍:1868-69, 1869-70, 1870-71）は、帰国後、工部省鉦山寮に出仕し、工部権少技長を経て、佐渡鉦山局長心得となった。藤本磐造（盤蔵、在籍簿名:Fugimoto, B.、確認在籍:1868-69, 1869-70, 1870-71）は、帰国後、工部省長崎造船局に出仕した。

vi) 1869-70 年

1869-70 年の留学生は 3 名である。その内、昨年度から在籍を継続した狛林之助と藤本磐造であり、新たに在籍した渡辺蒿蔵（天野清三郎、在籍簿名:Amano, S.、確認在籍:1869-70）は帰国後工部省に出仕した。

vii) 1870-71 年

1870-71 年の留学生は 7 名である。その内、在籍 3 年になるのが、狛林之助と藤本磐造であり、新たに三条公恭（学籍簿名:Sanjo, J.、確認在籍:1870-71）田口太郎、尾崎三良、村地才一郎とが加わった。三条は尾崎三良、大野直輔らを従えて渡英し 1873 年 10 月に帰国したが、その後は不明である。帰国後、田口太郎（学籍簿名:Takuchi, T.、確認在籍:1870-71）は大蔵省紙幣寮権部となり、その後、太政官、海軍省、司法省などの諸官を歴任した。尾崎三良（戸田三郎:、学籍簿名:Toda, S.、確認在籍:1870-71）は、さらにオックスフォード大学で 1 年間学び、帰国後太政官に出仕、以後左院議官、内務図書頭、元老院



議官、貴族院議員、法制局長官、宮内庁顧問などを歴任した。村地才一郎（学籍簿名:Muraji, Joe、確認在籍：1870-71, 1871-72）の帰国後の消息は不明である。その他、Kapadia, A.B. が在籍名簿に記されているが、詳細は不明である。

viii) 1871-72 年

1871-72 年の留学生は 6 名である。狛林之助の在籍は 4 年目に入り、村地才一郎が 2 年目の在籍となった。新たに加わったのが大野直輔、豊原百太郎、馬場辰猪、瓜生震である。大野直輔（学籍簿名:Ohno, K.、確認在籍:1871-72）は、1868-73 年の間、当時ユニバーシティ・カレッジで経済学を教えていたケアンズ（J.E.Cairnes, 1823-75）から経済学を学び、帰国後、大蔵省租税局に出仕し、後に造幣局長、銀行局長を経て、会計検査院部長となった。彼にはケアンズの講義をもとにして書いた『経済新話』（1877）があり、経済学者フォーセット（H.Fawcett, 1833-84）の *Pauperism, Its Causes and Remedies*（1871）の邦訳を『貧困救済論』（1887）として出版した。また、留学前に大蔵省造幣権允であった豊原百太郎（学籍簿名:Toyohara, H.、確認在籍:1871-72, 1872-73, 1873-74）は、帰国後、大蔵省書記官となったが、1879 年には株式会社硫酸製造（川口硫酸製造所、職工数 24 名）を設立した。馬場辰猪（在籍名:Baba, T.、確認在籍:1871-72）は、ミドル・テンプルでも学び、ヴィクトリア時代中期にあつてイギリスの社会改革に取り組んでいたイギリス社会科学振興協会<sup>52)</sup>に参加した。またロンドンの日本学生会を組織し、日本人留学生の交流を図った。その組織は、日本で発展し共存同衆となった。このクラブは、明六社とは異なり、平等な関係を重視するクラブで、そのクラブの全国展開こそが日本を民主化する運動であると考えた。著書としては『法律一斑』（1879）『天賦人權論』

52) 井上琢智「日本学生会、共存同衆、イギリス社会科学振興協会」（『馬場辰猪全集』第 1 巻月報 1）を参照のこと。また、イギリス社会科学振興協会については、井上琢智「イギリス社会科学振興協会—その歴史—」（久保芳和博士退職記念出版刊行委員会『上ヶ原 37 年』創元社、1888）、井上琢智「イギリス社会科学振興協会と経済学」（関西学院大学経済学部『経済学論究』第 42 巻第 2 号、1988）、井上琢智「イギリス社会科学振興協会とヴィクトリア中期の女性問題—NAPSS（1857-1866）の『会報』を中心に—」（『大阪女学院短期大学 紀要』第 18 号、1987）を参照のこと。

(1882) などがあり、*An Elementary Grammar of the Japanese Language with Easy Progressive Exercises* (1873) を書いて、森有礼の日本語廃止・英語採用論に反対し、日本語の有用性を主張した<sup>53)</sup>。瓜生震 (学籍簿名:Wurin, R.F.、確認在籍:1871-72, 1872-73, 1873-74) は、工部省鉄道寮に出仕し、鉄道敷設に従事し、退官後の 1877 年に高島炭坑石炭運輸主任を経て、三菱合資副支配人や初代営業部長を務めた。

ix) 1872-73 年

1872-73 年の留学生は 11 名である。豊原百太郎と瓜生震は 2 年目の在籍となったが、新たに 9 名もの留学生が加わった。正木退蔵、山口武、河瀬真孝、佐々木和三郎、森甚五兵衛、香月経五郎、原田宗助、吉田顕三、岩永省一である。

教育界で活躍したのは、正木退蔵 (学籍簿名:Masaki, T.、確認在籍:1872-73, 1873-74, 1876-77, 1878-79, 1879-80) である。彼は、留学生取締として滞在したが、帰国後は文部省に出仕し、東京職工学校校長となった。

大蔵省に関わった人物としては、山口武 (滞在名:Yamaguchi, T.、確認在籍:1872-73, 1873-74) がいる。帰国後、彼は大蔵省造幣局の技手として就職した。

工部省に関わった人物には、帰国後に工部少輔となった河瀬真孝 (音見清兵衛、学籍簿名:Otori, K.S.、確認在籍:1872-73)、帰国後工学寮に出仕し、鉾山寮へ転じ、最後に工部権少書記となった佐々木和三郎 (学籍簿名:Sasaki, W.、確認在籍:1872-73, 1873-74) がいる。さらに森甚五兵衛 (甚五郎、学籍簿名:Mori, J.T.、確認在籍:1872-73) は、帰国後工部省に出仕した。海軍で活躍したのは、原田宗助 (学籍簿名:Harada, S.、確認在籍:1872-73) と吉田顕三 (英就、学籍簿名:Yoshida, H.、医学部確認在籍:1872-73, 1873-74, 1875-76)<sup>54)</sup> である。原田はユニバーシティ・カレッジで修学後、アームストロング会社製鉄工場に移

53) 西田長壽、萩原延壽、川崎勝、杉山伸也編『馬場辰猪全集』第 1 巻、岩波書店、1988、269 頁。

54) この在籍名から考えると、吉田半七郎の可能性もあるが、その消息は不明であり、逆に吉田顕三とすると彼の経歴 (1872 年イギリス留学 7 年後に帰国) とほぼ一致するため、名簿の誤記と考えた。

り、造兵製鉄技術を学び、帰国後海軍大尉に任ぜられ、工部権少技長、火薬製造所長、兵器局兵器製造所製造課長を経て、海軍造兵総監となった。また、吉田は帰国後の1884年に海軍軍医少監となり、大監、軍務局副長、海軍病院長などを経て、大阪医学校校長兼病院長となった。民間で活躍したのは岩永省一（学籍簿名:Iwanaja, S.、確認在籍:1872-73, 1873-74）である。彼は慶應義塾を出て留学し、帰国後三菱会社に入社、郵船会社に転じ、専務取締役となった。これら帰国後各界で活躍したのに留学生とは対照的に、香月経五郎（学籍簿名:Katski, K.、確認在籍:1872-73）は、ユニバーシティ・カレッジ修学後、オックスフォード大学でも学んだが、帰国後佐賀の乱で死亡した。

x) 1873-74年

1873-74年の留学生は9名である。豊原百太郎、瓜生震は3年目の在籍となり、正木退蔵、山口武、佐々木和三郎、吉田顕三、岩永省一は2年目の在籍となった。新たに加わったのは、赤松連城と真辺戒作である。赤松連城（在籍名:Akamatz, S.、確認在籍:1873-74）は、西本願寺から派遣され、堀川教阿とともに私費で留学した。帰国後、神仏の分離、宗門独立に努め、仏教大学総理となった。真辺戒作（正精:Manabe, K.、確認在籍:1873-74, 1875-76）は、土佐藩江戸藩邸の学校舎長に任ぜられた。留学のため、アメリカを経てイギリスに渡ったが、ロンドンで馬場辰猪との間で決闘事件を起こした。滞英8年で帰国したがノイローゼのために自殺した<sup>55)</sup>。

xi) 1874-75年

一部資料が未整備であるが、確認できる1874-75年の留学生は2名である。三宮義胤と伊藤弥次郎である。このような急減は明治政府により1873年12月25日の太政官布達によって公費留学生が帰国した結果であった。三宮義胤（在籍簿名:Sannomiya, Y.、確認在籍:1874-75, 1875-76, 1876-77）は、帰国後、外務省に出仕し独逸公使館詰めとなり、後宮内省に転じ、大書記官、外事課長を経て、式部長となった<sup>56)</sup>。伊藤弥次郎（在籍簿名:Ito, Y.、確認在籍:1874-75,

55) 山本泰三『土佐の墓—その二—』土佐史談会、1987、294頁。なお、この決闘事件については、「馬場辰猪・真辺戒作決闘事件」（『馬場辰猪全集』第4巻、46-55頁）を参照のこと。

56) 井上琢智前掲論文「近代経済学導入の一齣—W.S. ジェヴォンズと7人の日本人留学生—」を

1875-76) は、私費で留学した後、その能力をかわれて 1879 年 1 月に工部省官費留学生となり、翌年帰国、1 年後権少技長として工部省鉦山課に入省した。

xii) 1875-76 年

1875-76 年の留学生は 9 名である。前年の在籍が未確認ではあるが吉田顕三は 4 年目であり、真辺戒作は 3 年目であり、伊藤弥次郎、三宮義胤は 2 年目であり、新たに加わったのは、井上勝之助、乙骨兼三、黒部鉦太郎である。井上馨を叔父にもち養子となった井上勝之助 (学籍簿名:Inouye, B.、確認在籍:1875-76)<sup>57)</sup> は帰国後大蔵省に出仕、後に日本銀行に入行した。転じて外務省で権少書記官、特命全権公使として独逸駐在ベルギー兼勤し、特命全権大使を最後に宮内省に転じて、式部長官を最後に退官した。乙骨兼三 (学籍簿名:Okkots, K.、確認在籍:1875-76) は、儒者乙骨彦四郎を父にもち、長男が太郎乙、次男亘で、その弟であり、外交官となった。黒部鉦太郎 (学籍簿名:Kurobe, H.、確認在籍:1875-77) の帰国後の消息は不明である。その他、名簿には、Nakabara, T. (確認在籍:1875-76) および Honda, K.C. (確認在籍:1875-76) と書かれた日本人が在籍しているが、その詳細は不明である。

xiii) 1876-77 年

1876-77 年の留学生は 5 名である。在籍が確認できるのは正木退蔵が 3 年目、三宮義胤が継続して 3 年目、黒部鉦太郎が継続して 2 年目である。新たに、桜井錠二と関谷清景が加わった。教育界で活躍したのは桜井錠二 (学籍簿名:Sakurai, J.、確認在籍:1876-77, 1878-79, 1879-80, 1880-81) と関谷清景 (学籍簿名:Sekuja, K.、確認在籍:1876-77) である。彼らはともに文部省第二回目の留学生であり、桜井は、帰国後東京大学講師、教授を経て、東京帝国大学理科大学学長となり、帝国学士院院長にも就いた。また 1917 年理化学研究所の創設に務めた。彼はウイリアムソンの原子論に沿った純粹理論化学を尊重

---

参照のこと。

57) 井上勝之助は、『日本人名大辞典』によれば、1871 年に海外留学生としてヨーロッパに滞在し、法律学を専攻したとされる。これによって、この Inouye, B. が井上馨ではなく (当時、馨は大阪会議開催のための努力をしており、海外滞在の可能性はまったく考えられない)、井上勝之助であると推定できる。

し、リービッヒの弟子でロンドンで活動し（1845-63）、1863年以後ベルリン大学教授となっていたホーフマン（A.W.Hofmann, 1818-92）に有機化学を学んだ長井長義と対立した<sup>58)</sup>。また、関谷は、帰国後東京大学助教、助教授を経て、帝国大学地震学教授となり、日本における地震学の祖となった<sup>59)</sup>。

xiv) 1877-78 年

一部資料が未整備であるが、確認できる 1877-78 年の留学生は大越成徳の 1 名である。

大越成徳（在籍名:Okoshi, N.、確認在籍:1877-80）は、帰国後リヨン駐在領事、ロンドン駐在領事、総領事、横浜税関長を経て、ブラジル駐在弁理公使となりアルゼンチン駐在公使を兼務した。そして、自由貿易論を主張した『外国貿易拡張論』（1889）を書いた<sup>60)</sup>。

xv) 1878-79 年

1878-79 年の留学生は 9 名である。在籍が確認できたのは正木退蔵が 4 年目、桜井錠二が 2 年目、大越が継続して 2 年目の在籍である。新しく加わったのは、伊賀陽太郎、亀井茲明、日下義雄、八田裕次郎、穂積陳重、山辺丈夫である。

教育界に身を置いたのは、伊賀陽太郎（在籍名:Iga, Y.、確認在籍:1878-79）と穂積陳重（入江、在籍名:Iriye, N.、確認在籍:1878-79）である。伊賀は、帰国後、農商務省出仕したが、ごく短期間で退官し、高等商業学校の教諭となった。しかし病を得て、宿毛に帰り、塾を主宰した<sup>61)</sup>。穂積は、すでにミドル・テンプル（確認在籍:1876.11-79.25）に在籍し、法廷弁護士の資格得ており、またキングス・カレッジにも在籍し、後にベルリン大学でも学んだ。帰国後東京大学法学部講師となり、翌年 1882 年には法学部教授兼法学部長となった。

---

58) 両者の抗争については、注 37 を参照のこと。また、井上琢智論文「日本学生会名簿」を参照のこと。

59) 橋本万平『地震学事始—開拓者・関谷清景の生涯—』朝日新聞社、1983 年、94-104 頁。

60) 井上琢智「大越成徳と自由貿易論」（『経済学論究』第 67 巻 2 号、2003）および前掲論文「近代経済学導入の一齣—W.S. ジェヴォンズと 7 人の日本人留学生—」を参照のこと。

61) 井上琢智前掲論文「近代経済学導入の一齣—W.S. ジェヴォンズと 7 人の日本人留学生—」および『宿毛人物史』（宿毛明治 100 年史〈人物編〉編集部、1968、35-40 頁）を参照のこと。

それまで英米法が教えられていた東京大学では、以後ドイツ法が受容されるようになった。東京大学法学部卒業した弟穂積八束も 1884 年ドイツに留学し、明治憲法発布直前に帰国し、帝国大学法科大学教授となり、初代の憲法講座担当者となった。これら東京大学の英米法からドイツ法への転向の影には井上毅がいたと言われている<sup>62)</sup>。

実業界で活躍したのは山辺丈夫（学籍簿名:Yamanobe, T.、確認在籍:1875-76, 1878-79）である。彼はユニバーシティ・カレッジでジェヴォンズから経済学を学び、さらに、キングス・カレッジで工学を学び、後に紡績業の実習のためにマンチェスター市やブラックバーン市のローズヒル工場での研修を終え、帰国した。その後、経済学研究から紡績業への転身を薦めた渋沢栄一とともに大阪紡績を設立し、後に三重紡績との合併にによって設立された東洋紡績の社長となった<sup>63)</sup>。

官界で活躍したのは、日下義雄（在籍名:Kusaka, Y.、確認在籍:1878-79）である。日下は、帰国後紙幣寮に出仕し、行政整理と登記法実施を建議、その才能を認められ内務権書記官となった。その後農商務大書記官となり統計課長となり、駅逓官を兼任、郵便制度を革新し、駅逓局長となった。長崎、福島県知事を経て、第一銀行取締役などを歴任した<sup>64)</sup>。

海軍兵学寮から派遣されすでにグリニッチ海軍大学（1877.12-78.6）で学んだ八田裕次郎（在籍名:Hatchidda, E.、確認在籍:1878-79）は、帰国後大尉、少佐となり、イギリス公使館付武官となり、大佐に昇格してフランス公使館付武官を勤めて退転。衆議院議員となった。また、亀井茲明（在籍名:Kamei, K.、確認在籍:1878-79, 1879-80）は、すでにキングス・カレッジ（確認在籍:1877-78）で学んでいた。帰国後、宮内庁御用掛外事課に務めた。1886-91 年にはベルリ

62) 大久保泰甫『日本近代法の父 ボワソナアド』岩波新書、1998（1977 初版）、128-29 頁。

63) 井上琢智「W.S. ジェヴォンズの経済学講義 1878-1879 - 留学生山辺丈夫の筆記ノートについて -」（『大阪商業大学論集』第 56 号、1979）および井上琢智「日本学生会名簿」（『馬場辰猪全集』第 4 巻、1988）を参照のこと。ただし、在籍名簿に初出の 1878-79 年に、最初の入学が 1875-76 年と記入されているが、これは誤りである。

64) 井上琢智前掲論文「近代経済学導入の一齣 - W.S. ジェヴォンズと 7 人の日本人留学生 -」を参照のこと。

ン大学に留学した。帰国後侍従を務め、また東洋美術学会を創立した。その他、名簿には Inouye, S.T.A. (確認在籍:1878-79) と書かれた日本人が在籍しているが、その詳細は不明である。

xvi) 1879-80 年

1879-80 年の留学生は 10 名である。在籍が確認できるのは、正木退蔵が 5 年目、大越成徳、桜井錠二が継続して 3 年目の在籍である。亀井茲明が継続して 2 年目の在籍であった。新たに加わったのは、杉浦重剛、大浦茂彦、河上謹一、末松謙澄、Kihara, M.、Tadashi, S. である。

杉浦重剛 (在籍名:Sugaira, S.、確認在籍:1879-80) は、桜井錠二と関谷清景とともに文部省第二回目の留学生で、サイレンセスター農学校 (1876 年 8 月 18 日から同年 9 月) からオウエンズ・カレッジ (1876 年 12 月-) へ、さらにサウス・ケンジントン化学学校 (78 年 10 月-) へと移って化学を学んで、学問上の業績をあげており、この年度にユニバーシティ・カレッジに在学している。帰国後、東京大学予備門長に任命され、文部大臣森有礼の推挙を得て東京大学寄宿掛取締、高等教育会議議員などを歴任したが、辞職し東京英語学校 (後の日本中学校) を創立し、以後日本主義・国粹主義の立場から啓蒙に努め、また、東亜同文院長や昭和天皇の御用掛を務めた。末松謙澄 (在籍名:Suyematz, K.、確認在籍:1879-80) は、その後ケンブリッジ大学に移り (Newnham College, 1881 M 1881 → St.John's College, 1881-84, LL.B. 欠席授与 1888)、帰国後正院御用掛から文部省参事官などを経て、貴族院議員、逓信相、内相を務めた。

河上謹一 (在籍確認:1879.10-80.2) は、引き続き 1880 年にキングス・カレッジへ転校し、レヴィー (L.Levi, 1821-88) から、商法、会社法などを学んだ。帰国後、農商務省権少書記、東京商業学校校長、上海総領事などをへて、日本銀行へ転じ取締役、支配人、銀行局長、金庫監査役、株式局長などをへて、1899 年日銀理事に就任した<sup>65)</sup>。また、大浦茂彦 (在籍名:Oura, S.、確認在

65) 井上琢智前掲論文「近代経済学導入の一齣— W.S. ジェヴォンズと 7 人の日本人留学生—」を参照のこと。なお、この在籍確認は *Fees Books, University College* による調査の結果である。また、一海知義「河上肇と河上謹一—晩年の交流—」『甲南経済学論集』第 25 巻第 4 号、

籍:1879-80) は、京城領事官外務通訳官を務めたことがある。その他、名簿には Kihara, M. (確認在籍:1879-81)、Tadashi, S. (確認在籍:1879-80) と書かれた日本人が在籍しているが、その詳細は不明である。

xvii) 1880-81 年

1880-81 年の留学生は 4 名である。桜井錠二は継続して 4 年目 Kihara は 2 年目の在籍である。新たに加わったのは、Katsuno, K. (確認在籍:1880-81)、Kinnagei, N. (確認在籍:1880-81) であるが、その詳細は不明である。

xviii) 1881-82 年

1881-82 年の留学生は、1 名であり、Yamamoto, Y.H. (確認在籍:1881-82) と書かれているが、その詳細は不明である。

xix) 1882-83 年

1882-83 年の留学生は、1 名であり、その名は藤沢利喜太郎 (Fujisawa, R., 確認在籍:1882-83) である。彼はさらにストラスブルグ大学やベルリン大学でも学んだ。菊池大麓の薦めで数学を学んだ彼は、帰国後帝国大学教授となり、ドイツ式の研究中心の教育を行い、菊池から数えて三代目に当たる高木貞治や林鶴一など優れた数学者を育てた。

xx) 1883-84 年

在籍者は確認できない。

xxi) 1884-85 年

1884-85 年の留学生は 2 名である。添田寿一と徳川義礼である。大蔵省入省後、退官して私費留学した添田寿一 (在籍名:Soyeda, J., 確認在籍:1884-85) は、その後ケンブリッジ大学 (在籍名:Soyeda Juichi, 確認在籍:Newnham Colleg, L 1885) へ移りマーシャル (A.Marshall, 1842-1924) のもとで経済学を学び、さらにハイデルベルク大学へ留学した。帰国後大蔵省主税官となり、1893 年には貨幣制度調査会に政府委員として参加し、金本位制を主張した。また、農商工高等会議 (1896 年および 1898 年) では、工場法の必要性を説いた。その後、

---

1985 (杉原四郎・一海知義『河上肇一人と思想』新評論、1986 に再録) および水田洋『思想の国際転位—比較思想史的研究—』(名古屋大学出版会、2000、229-35 頁) を参照のこと。



大蔵次官、台湾銀行頭取、日本興業銀行総裁、鉄道院総裁、報知新聞社社長を務めたり、鈴木文治を助けて友愛会の創立に貢献した<sup>66)</sup>。徳川義礼 (Tokugawa, Y.A., 確認在籍:1884-85, 1886-87) は、帰国後貴族院議員となった。

xxii) 1885-86 年

1885-86 年の留学生は 4 名で、堀鉞之丞、野呂景義、Kawasaki, H.、Sasaki, T. である。

堀鉞之丞 (在籍名:Hori, E.、確認在籍:1885-87) は、帰国後衛生試験所技師となり、後に第一高等学校教授となった。また、野呂景義 (在籍名:Noro, K.、確認在籍:1885-86) は、その後フライブルク鉱山大学にも留学し、帰国後、東京大学准教授を経て、帝国大学工科大学教授となり、鉄冶金学を教える一方、農商務省技師を兼ね、官営八幡製鉄所の設立計画原案を策定し、日本鉄鋼協会を設立しその初代会長となった。その他、名簿には Kawasaki, H. (確認在籍:1885-86)、Sasaki, T. (確認在籍:1885-86) と書かれた日本人が在籍しているが、その詳細は不明である。

xxiii) 1886-87 年

1886-87 年の留学生は 2 名である。堀鉞之丞と徳川義礼であり、ともに 2 年目の在籍である。

xxiv) 1887-88 年

1887-88 年の留学生は 3 名である。福富孝季、松浦厚、陸奥広吉である。福富孝季 (在籍名:Fukutomi.T.、確認在籍:1887-88) は、高等師範学校教授をへて留学、帰国後『東洋学芸雑誌』『日本新聞』を創刊する一方、明治義塾などで教えた。松浦厚 (在籍名:Matsura, A.、確認在籍:1887-88, 1888-89) は、その後ケンブリッジ大学 (確認在籍:Trinity College, 1890-?, M 1890) に転じ、国際法を学び、帰国後貴族院議員となり、地元の平戸の殖産事業に従事した。陸奥宗光の長男で東京大学法学部を卒業した陸奥広吉 (在籍簿名:Mutsu Hirokichi, 確認在籍:1887-93) も、その後ケンブリッジ大学 (確認在籍:Trinity Hall, 1888.10-12, M 1888) へ転校し、ミドル・テンプルで法廷弁護士の資格

66) 西川俊作『福沢諭吉と三人の後進たち』日本評論社、1985 を参照のこと。

を取得（1893 年 11 月 17 日）した。帰国後、外務省に勤務し、翻訳官を皮切りに、外交官及領事館試験に合格後は、サンフランシスコ領事、1907 年の臨時駐英大使などを経て、ベルギー駐在特命全権公使などをつとめた。その他、東京大学講師や弁護士となり、英吉利法律学校（中央大学）の創立にも参加した。

xxv) 1888-89 年

1888-89 年の留学生は 3 名である。松浦厚は 2 年目の滞在であり、新たに Okada, T. (確認在籍: 1888-89)、Sakurai, K. (確認在籍: 1888-89) が加わったが、その詳細は不明である。

### 3) キングス・カレッジ留学生<sup>67)</sup>

イギリス国教会は、非国教徒によるユニバーシティ・カレッジの創立に対抗して、1829 年にユニバーシティ・カレッジと同類の大学として創立されたキングス・カレッジには、ユニバーシティ・カレッジのウィリアムソンのような人物が不在であったこともあり、これまでそれほど多くの留学者は確認できていない。もっとも、その中でも、何人かの日本人留学者が世話になったのは、L. レヴィーである。彼はイタリアのアンコーナに生まれ、1844 年に渡英し、リヴァプールで働きながら *Chambers and Tribunals of Commerce, and proposed General Chamber of Commerce in Liverpool* (1849) と *On the State of the Law of Arbitrament, and proposed Tribunal of Commerce* (1850) を出版し、注目を集めた。1851 年にはロンドンの統計協会のフェローとなり、翌 52 年にはキングス・カレッジに新設された商学講座の教授となり、1861 年にはチュービンゲン大学から経済・政治科学の博士号を得た。一方、1859 年にはリンコーンズ・インで弁護士の資格をとり、イギリス社会科学振興協会などに属するなどした実務に長けた学者であった。主著は *History of British Commerce*

67) キングス・カレッジの留学生の実態については、そのキングス・カレッジ側の授業料納付記録、在籍名簿、卒業生名簿などによる総合的な調査は出来ていない。ただし、森田嘉彦「明治鉄道創立の恩人—エドモンド・モレル氏を偲ぶ—」（日本交通協会『汎交通』第 97 巻 2 号、1997）および Y. Morita “Edmund Morel, a British Engineer in Japan,” (I. Nishi (ed.), *ibid.*) は、キングス・カレッジ・スクールの在籍簿によるモレルの在籍を確認した研究である。

*and of the Economic Progress of the British Nation, 1736-1870* (1870) であり、邦訳として、田口卯吉訳『大英商業史』(1879)、専修学校講義録として用いられた土子金四郎の抄訳(1887-88)がある。その他、豊島佳作訳『万国商法』(1877)が実用書として用いられた。現在のところ在籍が確認ないしは可能性が認められている留学生を年代順に見てみよう。

i) 1874-75 年

1871-76年にアメリカのラトガース大学で学んでいた原保太郎は渡英し、この期間キングス・カレッジのレヴィーのもとで学んだ。帰国後、彼は山口県知事、福島県知事などを歴任した。また、慶應義塾で学んだ中上川彦次郎は、1874年12月から77年10月まで留学し、その渡英に同行したのは星亨であり、帰国の際の同伴者は慶応での先輩小幡篤次郎であった。イギリスでは菊池大麓の世話でモルトビー宅に寄宿し、「英国商業史の著者として有名なるレオンレヴキーに就き経済学の講義を聴聞したることもありしが容易に人に敬服せざる君の癖とてレヴキーの講義も宜加減なものなりなど冷評を下し居たる有様」<sup>68)</sup>であったという。この滞英中1878年に井上馨と出会い、その才能を認められた。帰国後、工部省へ出仕し、後に外務省に転じ、さらには時事新報社を創立した。

ii) 1876-77 年

岡村輝彦は、この間キングス・カレッジに在籍し、その後1878年11月から80年1月にかけて、ロンドンにあったミドル・テンプルで法律を学び、帰国後、司法省民事局に出仕し、その後、英吉利法律学校(中央大学)創立に参加した。また、向坂兌は、この間キングス・カレッジに在籍し、同時に1876年11月からミドル・テンプルにも在籍し、79年6月まで在学した。しかし、帰国直後に死亡した。

iii) 1877-78 年

この期間には原六郎(長政)がキングス・カレッジ夜間部のレヴィーのもとで学んだことが確認されている。すでに彼は1871-77年にアメリカのイェール

68) 日本経営史研究所『中上川彦次郎伝記資料』東洋経済新報社、1969、38-39頁。

大学に留学した経験をもち、77年に渡英し、キングス・カレッジへと移籍したのである。1878年5月に帰国し、大蔵省に出仕、その後、第百国立銀行頭取、東京貯蓄銀行頭取、横浜正金銀行頭取を務めるなど、主として金融界で活躍した<sup>69)</sup>。また、この期間、1878-80年ユニバーシティ・カレッジに在籍していた亀井茲明は、キングス・カレッジにも在籍していた。

iv) 1879-80年

1873-82年の間ラグビー校に留学していた井上十吉は、キングス・カレッジに在籍し、1882年には王立鉱山学校に移籍した。また、1875年から76年、さらにジェヴォンズのもとで学ぶために1878年から79年にかけてユニバーシティ・カレッジに在籍していた山辺丈夫もまたほぼ同時期にキングス・カレッジでも学んでいた。

その他、1879年10月から80年2月までの期間ユニバーシティ・カレッジに留学していた河上謹一は、ほぼ同時期にキングス・カレッジでレヴィーから指導を受けている。また、1876年11月から79年6月までミドル・テンブルに在籍し、1878年から79年までユニバーシティ・カレッジに在籍していた穂積陳重は、ほぼ同時期にキングス・カレッジにも在籍していたと思われる。また、東京大学第1回卒業生である和田垣謙三は、留学に際して、森有礼から「ジェヴォンズの経済学(講義)を受けるよう勧め」<sup>70)</sup>られ、1880年イギリスへ留学するが、すでにジェヴォンズは辞任しており、ケンブリッジ大学に移る前の一時期、キングス・カレッジに在籍している。

#### IV. おわりに

このように幕末・明治初期にあつて日本人のイギリスの留学先としてもっとも適したユニバーシティ・カレッジへの留学は、H. マセソンやT. グラヴァーのような幕末期の商人にせよ、H. パークスやJ.F. ラウダーのような外交官にせよ、その紹介を得る一方で、受け入れ先のA.W. ウィリアムソンなどの個

69) 原邦造編『原六郎翁伝』1937を参照のこと。

70) 小山騰『破天荒<明治留学生>列伝』講談社、1999、194-98頁。

人的努力によって実現したのであり、その時期は、幕末から 1870 年代初期にかけてであった。その際のユニバーシティ・カレッジ・スクールやユニバーシティ・カレッジそしてキングス・カレッジ・スクールやキングス・カレッジの役割は、まずは英学修得の場としてであり、その英学を基礎として、化学・工学・経済学などの近代科学の入門を学ぶ場としてであった。従って、彼らはそれぞれの分野で、日本の近代化を直接推進する原動力としての役割を演じることになった。

しかし、宗派審査（1871）、予備試験でのギリシア語試験の廃止（1887）、ラテン語試験の東洋古典語での代替（1906）がケンブリッジ大学で可能になったように、オックスブリッジ大学への日本人留学生の入学が可能になるにつれて<sup>71)</sup>、ユニバーシティ・カレッジの役割はそれらオックスブリッジへ、さらには 1880 年代に入ると新興国ドイツの大学へ進学するための通過大学としての役割へと変化していった。このような状況の変化に対応して、オックスブリッジへの留学生は、ユニバーシティ・カレッジとは異なり、当初「もと大名の子弟かまたは明治維新の功労者の子弟」であり、「その後加わるのが明治時代に勃興するする実業家の子弟」<sup>72)</sup>であり、オックスブリッジの提供する「人格の育成に重点がおかれ」る「ジェントルマン養成」<sup>73)</sup>のための教育を受けることができた。もっとも、エドワーズ（H.J.Edwards）の 1905 年 1 月 1 日ロンドンで開催された日本協会の第 78 回定例講演会での発言に見られるように、オックスフォード大学に比べて、ケンブリッジ大学では第一にさまざまな学位の取得が可能であり、第二に大学やカレッジの教師が学生を丁寧に教育・指導したからであり、第三にすでに指摘したように入学条件の緩和のためであった<sup>74)</sup>。

71) 安東伸介他編『イギリスの生活と文化事典』研究社出版、1982、476 頁。さらに、オックスフォード・ケンブリッジ法令（1882）により、フェローの妻帯が初めて認められた。これらについては、小山騰前掲書（182-83 頁）も参照のこと。

72) 小山騰前掲書、176 頁。

73) 小山騰前掲書、176 頁。

74) *Transactions and Proceedings of the Japan Society*, 1905, pp.45-58. なお、この日本協会の歴史の概観については、H.Cortazzi, “The Japan Society: A Hundred-Year History,” in Sir H.Cortazzi and G.Daniels, *Britain and Japan 1859-1991*, 1991（「日本協会百年の歴史」大山瑞代訳『英国と日本—架橋の人びと—』思文閣出版、1998）を参

加えて、「日本人知識人にとって、＜菊池大麓にその典型的な例を見るように＞数学を中心としたより実用的な教育をするケンブリッジの方が、古典を中心とする哲学的なオックスフォードよりも魅力的であるように思われる」<sup>75)</sup>。

このように日本の近代化の進行とともにユニバーシティ・カレッジとキングス・カレッジを含むロンドン大学はしだいにその留学先としての役割を終えていくのである<sup>76)</sup>。

---

照のこと。また、小山騰前掲書（226 頁）を参照のこと。

75) 安東伸介前掲書、462 頁。なお、これは *The Times* (1904 年 11 月 4 日) の記事である。従って、オックスフォードへは、サンスクリット語を学んだ笠原研寿や南条文雄のように仏教界の留学生が留学した。

76) ちなみに井上琢智前掲論文「幕末・明治・大正期イギリス日本人留学生資料 (1)」には、大正時代までのロンドン大学への留学生 119 名 (延人数) を挙げている。それに対してケンブリッジ大学への留学生 62 名 (延人数)、オックスフォード大学への留学生 30 名 (延人数) である。

## 【付表】ユニバーシティ・カレッジ留学生一覧

年代	人数	留学者名
1863-64	〈3名〉	〈山尾庸三、遠藤謹助、井上勝〉*
1864-65	3名	山尾庸三、遠藤謹助、井上勝
1865-66	17名	井上勝、鮫島尚信、中村宗見、森有礼、畠山義成、吉田清成、市来勘十郎、田中静洲、町田久成、東郷愛之進、村橋直衛、町田申四郎、高見弥一、名越平馬、町田清次郎、Miniami、Mattumutta
1866-67	6名	井上勝、鮫島尚信、吉田清成、市来勘十郎、畠山義成、Miniami
1867-68	0名	
1868-69	2名	粕林之助、藤本磐造
1869-70	3名	粕林之助、藤本磐造、渡辺蒿蔵
1870-71	7名	粕林之助、藤本磐造、田口太郎、村地才一郎、尾崎三良、三条公恭、Kapadia, A.B.
1871-72	6名	粕林之助、村地才一郎、大野直輔、豊原百太郎、瓜生震、馬場辰猪
1872-73	11名	豊原百太郎、瓜生震、正木退蔵、山口武、河瀬真孝、佐々木和三郎、森甚五兵衛、香月経五郎、原田宗助、吉田顕三、岩永省一
1873-74	9名	豊原百太郎、瓜生震、正木退蔵、山口武、佐々木和三郎、吉田顕三、岩永省一、赤松連城、真辺戒作
1874-75	2名	三宮義胤、伊藤弥次郎（一部資料未整備）
1875-76	9名	井上勝之助、吉田顕三、三宮義胤、乙骨兼三、黒部鉦太郎、真辺戒作、伊藤弥次郎、Nakabara, T.、Honda, K.C.
1876-77	5名	正木退蔵、三宮義胤、黒部鉦太郎、桜井錠二、関谷清景
1877-78	1名	大越成徳（一部資料未整備）
1878-79	9名	正木退蔵、山辺丈夫、桜井錠二、伊賀陽太郎、亀井茲明、日下義雄、八田裕次郎、穂積陳重、Inouye, S.T.A.
1879-80	10名	正木退蔵、桜井錠二、亀井茲明、大越成徳、大浦茂彦、杉浦重剛、末松謙澄、河上謹一、Kihara, M.、Tadashi, S.
1880-81	4名	桜井錠二、Kihara, M.、Katsuno, K.、Kinnagei, N.
1881-82	1名	Yamamoto, Y.H.
1882-83	1名	藤沢利喜太郎
1883-84	0名	
1884-85	2名	添田寿一、徳川義礼
1885-86	4名	堀鉞之丞、野呂景義、Kawasaki, H.、Sasaki, T.
1886-87	2名	堀鉞之丞、徳川義礼
1887-88	3名	福富孝季、松浦厚、陸奥広吉
1888-89	3名	松浦厚、Okada, T.、Sakurai, K.

\* 1863年以前の調査はできていない。したがって、井上馨、伊藤博文の在籍は未確認である。